

D 3  
15-2  
1005  
(49)

博士論文

スポーツ映像の文化解釈学：  
スポーツ文化論への射程

平成10年度

舛本直文

筑波大学

99012474

981116 (DR)

目次	1
序章	7
1 緒言：研究の動機	9
2 研究の目的	11
3 研究の方法	12
4 研究の性格・対象・範囲	13
5 研究の意義	16
6 論文の構成	18
7 用語の説明	21
7-1 スポーツ映像とは	21
7-2 文化解釈学とは	22
7-3 ヘゲモニーとは	22
8 予備的考察：スポーツ映像の文化解釈論からスポーツ文化論への射程	23
8.1 文化論	24
8.2 スポーツ文化論	26
8.3 スポーツ映像文化のスポーツ文化論的寄与	30
注	31
文献 References	31
第1章 スポーツ映像に関する先行研究の批判的検討	35
1.1 日本におけるスポーツ映像研究	37
1.1.1 研究誌および単行本における研究状況	37
1.1.2 体育事典類における整理状況	39
1.1.3 体育系雑誌における状況	40
1.1.4 映画評論における状況	43
1.1.5 野球映画研究の状況	44
1.1.6 日本におけるスポーツ映像研究のまとめ	45
1.2 英米におけるスポーツ映像研究	46
1.2.1 スポーツ映像研究総論	47
1.2.2 研究誌にみる研究状況	50
1.2.3 映画評論における状況	53
1.2.4 ベースボール映画研究の状況	55
1.2.5 オリンピック映像研究	62
1.2.6 英米におけるスポーツ映像研究のまとめ	67
1.3 本章のまとめ	68
注	68
文献 References	69
第2章 方法論的検討	73
2.1 緒言	75
2.2 映画研究における方法としてのテキスト論	75
2.2.1 映画研究一般におけるテキスト論	76
2.2.2 意味生成のテキスト論	78
2.2.3 映画研究におけるテキスト論	79
2.3 テキスト論とは：言語学、記号論、文化記号論	79

2.3.1	言語学におけるテキスト論	79
2.3.2	記号学におけるテキスト論	80
2.3.3	文化記号論におけるテキスト論	81
2.4	哲学的解釈学におけるテキスト論と解釈の方法	82
2.4.1	解釈学のマトリックス	83
2.4.2	解釈の「地平」	83
2.4.3	解釈と「先入見」	84
2.4.4	解釈における「疎隔」と「帰属」	84
2.4.5	解釈学的循環	85
2.5	スポーツの文化解釈学および遊戯研究におけるテキスト論	86
2.5.1	スポーツの解釈学の系譜	86
2.5.2	ギアーツの解釈学	86
2.5.3	ハリスのスポーツの解釈学的循環	87
2.5.4	パークのスポーツ史学と解釈学	88
2.5.5	ハーバーの行為テキスト論	88
2.5.6	チェスカによる遊びのテキストの構造と解釈	89
2.6	パラドックス論・スペクタクル理論	90
2.6.1	遊び・スポーツにおけるパラドックス論	90
2.6.2	ベイトソンの遊びのパラドックス論	91
2.6.3	スポーツ・スペクタクル理論	95
2.7	本章のまとめ：本研究における多層的準拠枠：テキスト、コンテキスト、メタ・テキスト	98
	注	99
	文献 References	101
	図 2-1 スポーツの解釈学の系譜	105
	図 2-2 解釈学マトリックス	106
第3章	喜劇化されるスポーツ：スポーツへの逆照射	107
3.1	緒言	109
3.2	身体技法としてのサイレント・コメディ	110
3.2.1	サイレント・コメディ	110
3.2.2	サイレント喜劇映画を身体技法と見なす意義	112
3.2.3	サイレント・コメディの解釈の諸相	114
3.3	3大喜劇王のスポーツ・コメディ	117
3.3.1	『ロイドの人気者 The Freshman』における身体技法	117
3.3.2	『キートンの大学生 College』における身体技法	119
3.3.3	チャップリンのスポーツ喜劇の身体技法	122
3.3.4	3大喜劇王のスポーツ・コメディの比較	123
3.4	喜劇映画の中のゴルフ	125
3.4.1	喜劇アニメとゴルフ：ディズニー・アニメ	127
3.4.2	W. C. Fields のゴルフ喜劇	128
3.4.3	C.チャップリンのゴルフ映画	129
3.5	喜劇映画における道化の役割：メタ・テキストへ	133
3.5.1	スポーツ・コメディ映画における道化の機能	133
3.5.2	スポーツ喜劇映画の3重のフレーム・ワーク	135
3.6	本章のまとめ	136
	注	137
	文献 References	137
	図 3-1 3大喜劇王のスポーツ・コメディの比較	140

図 3-2 スポーツ喜劇映画の3重のフレーム・ワーク	141
<b>第4章 理想化されるスポーツ：スポーツ映像の中に見るオリンピズム</b>	143
4.1 緒言	145
4.2 オリンピック映画等に関する先行研究	146
4.2.1 オリンピック映画史	146
4.2.2 オリンピック映画関連の映画批評・映像研究	147
4.3 研究の方法・対象	148
4.3.1 研究の方法と解釈のフレーム・ワーク	148
4.3.2 研究の対象とその限定	149
4.4 テクスト化およびコンテキストの確認：映像の中のオリンピズムの試行的解釈	150
4.4.1 テクスト化およびコンテキストの確認	150
4.4.1-(1) 『民族の祭典 Olympia, ドイツ, 1938』	151
4.4.1-(2) 『東京オリンピック Tokyo Olympiade, 日本, 1965』	151
4.4.1-(3) 『白い恋人達 13 jour en France, フランス, 1968』	151
4.4.1-(4) 『炎のランナー Chariots of Fire, イギリス, 1981』	152
4.4.1-(5) 『マイ・ライバル Personal Best, アメリカ, 1982』	152
4.4.1-(6) 『ロンリー・ウェイ Running Brave, アメリカ, 1983』	152
4.4.1-(7) 『フィニッシュ・ライン Finnish Line, アメリカ, 1989』	153
4.4.2 メタ・テキストへの配慮	154
4.5 論議	155
4.5.1 オリンピズムとは	155
4.5.2 映画の中で表現されたオリンピズムの多元性	156
4.5.2-(1) 個人的完成、達成のレベル＝個人主義 individualism	157
4.5.2-(2) チームや民族の賛歌＝民族主義 ethnocentrism	157
4.5.2-(3) 国の名誉＝国家主義、愛国主義 nationalism, patriotism	157
4.5.2-(4) 国際的交流や理解、国際親善、平和＝国際主義 internationalism	157
4.5.2-(5) 普遍的人間性＝普遍的人間主義 universal humanism = 超国家主義 transnationalism	157
4.6 伝説化と神話化＝理想化する力	158
4.7 オリンピック・スポーツ関連映画の解釈のフレーム・ワーク	161
4.8 本章のまとめ	162
注	163
文献 References	164
図 4-1. 理想化されるスポーツ：オリンピズム映像解釈のためのフレーム・ワーク	167
<b>第5章 夢想化されるスポーツ：ベースボール映画の象徴論</b>	169
5.1 緒言	171
5.2 ベースボール映画に見るキャッチボールの象徴論	171
5.2.1 夢を与え続ける映画の機能	171
5.2.2 映画の中の父と息子のキャッチボール・シーン	172
5.2.3 父と息子のキャッチボール：その理由	174
5.2.4 キャッチボール映像のコンテキスト	175
5.2.5 キャッチボールのメタ・テキスト	175
5.2.6 夢の実現：ドリーム・カム・トゥルー	177
5.3 ベースボール映画とアメリカン・ドリーム	178
5.3.1 両者の関連	178
5.3.2 アメリカン・ドリームの象徴場面の抽出・記述	181

5.3.3	ベースボール映画の象徴的レベルとアメリカン・ドリーム	185
5.3.4	ベースボールにおけるアメリカン・ドリーム	187
5.3.5	ベースボール映画の象徴解釈の多重的フレーム・ワーク	188
5.4	本章のまとめ	189
注		190
文献	References	190
図 5-1	アメリカン・ドリーム (to have & to be) の2タイプとそれを取り巻く諸条件	193
図 5-2	ベースボール映画の象徴解釈のフレーム化	194
第6章	目的化されるスポーツ：現実社会との接点	195
6.1	緒言	197
6.2	スポーツ目的のテキスト化：何のためにスポーツするのか	199
6.2.1	何のために走るのか：『炎のランナー Chariots of Fire』における社会的関与	199
6.2.1-(1)	ハードル・シーンのメタファー	201
6.2.1-(2)	身体強健なキリスト教徒	202
6.2.1-(3)	映画のタイトルとテーマ	203
6.2.2	何のために走るのか：『長距離走者の孤独 The Loneliness of the Long Distance Runner』の社会的関与	205
6.2.3	何のために勝とうとするのか：勝利至上主義社会	208
6.2.4	何のために闘うのか：反人種差別	211
6.2.4-(1)	『炎のランナー Chariots of Fire』	211
6.2.4-(2)	『ロンリー・ウェイ Running Brave』	212
6.2.4-(3)	『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』	215
6.2.5	何のために復活するのか：自己ベストへの挑戦	217
6.3	スポーツ目的の形而上学	220
6.3.1	スポーツにおける自己の存在証明	221
6.3.2	スポーツの目的の自明性批判	223
6.4	目的化されるスポーツのメタ・メッセージ：スポーツドラマのフレーム・ワーク化	226
6.5	本章のまとめ	227
注		229
文献	References	230
図 6-1	ドーピングを取り巻く状況	232
図 6-2	目的化されるスポーツのフレーム・ワーク	233
第7章	記録化されるスポーツ：オリンピック大会のドキュメンタリー映像	235
7.1	緒言	237
7.2	『オリンピア』：リーフェンシュタールの身体映像	239
7.2.1	オリンピック・イヤーの変更	239
7.2.2	映画の概要：テキスト化	241
7.2.3	リーフェンシュタール評	243
7.2.4	映像解釈のフレーム・ワーク：テキスト、コンテキスト、メタ・テキストの関連性	244
7.2.5	制作・発表当時の状況	245
7.2.6	日本の状況	246
7.2.6-(1)	1940年本邦初公開時	246
7.2.6-(2)	『民族の祭典（総集編）』の再上映時	247
7.2.6-(3)	1992年オリンピック・イヤーでの「レニ・リーフェンシュタール展」	...

.....	247
7.2.7 リーフェンシュタール自身の制作意図等	248
7.2.7-(1) 制作承諾への決意	248
7.2.7-(2) 制作理念と構想	249
7.2.7-(3) 撮影と編集	251
7.2.7-(4) 表現内容	254
7.2.8 『民族の祭典（総集編）』の現代的意味の解釈	256
7.2.8-(1) スポーツ映像文化として	256
7.2.8-(2) 現代のスポーツ状況とのスーパー・インポーズ	257
7.2.9 『オリンピア』に関する結語	258
7.3 『東京オリンピック Tokyo Olympiad』：「芸術か記録か」の論争からみたオリンピズム	259
7.3.1 『東京オリンピック』の解釈の進め方	259
7.3.2 制作の経緯及び「記録か芸術か」の論争	262
7.3.2-(1) 批判の中心点	262
7.3.2-(2) 市川崑監督の反論	263
7.3.3 映像のコンテクスト	263
7.3.4 映像のメタ・テクスト	265
7.3.5 作品構成と解釈	266
7.3.5-(1) ミザンセヌ	266
7.3.5-(2) 後撮り・別撮り	267
7.3.5-(3) 編集	268
7.3.6 作品解釈と主要メッセージ	269
7.3.6-(1) 「夢としての平和」	269
7.3.6-(2) 「太陽の下の平等」	270
7.3.6-(3) 「普遍的人間性」	270
7.3.7 オリンピズムと国家主義、国際主義および超国家主義	271
7.4 記録化されるスポーツのフレーム・ワーク化	272
7.5 本章のまとめ	273
注	275
文献 References	276
図 7-1 記録化されるスポーツのフレーム・ワーク：『オリンピア』と『東京オリンピック』	280
結章 スポーツ映像の文化解釈学：一般的フレーム・ワークの構築	281
1 映像の視軸としてのスポーツのイメージ化の5方向	283
2 映画という形式の中のスポーツ解釈の一般的フレーム・ワークの構造	289
3 スポーツ映像文化のスポーツ文化論的寄与	292
4 メディア・リテラシーの必要な情報社会に向けて	294
5 今後の課題及び展望	296
文献 References	297
図 8-1 スポーツ映像におけるスポーツのイメージ化の5つの方向	298
図 8-2 スポーツ映像の文化解釈学：一般的フレーム・ワーク	299
補遺	301
補遺	303
補章1 スポーツ映像のイメージ形成・強化装置としての機能：『炎のランナー』を事例として	305

1.1 緒言	307
1.2 スポーツに対するイメージおよびその調査法	308
1.3 結果および考察	310
1.3.1 スポーツに対するイメージの変化の概要	310
1.3.2 スポーツに対する観賞者の既存の知識の影響ースポーツ映像の啓蒙の機能の推定	311
1.3.3 スポーツ選好とスポーツに対するイメージ	312
1.3.4 スポーツ映像の啓蒙機能とスポーツに対するイメージの変容	312
1.3.5 スポーツに対するイメージの変容に影響した命題	313
1.4 結論	313
1.5 本章のまとめ	314
注	315
文献 References	316
図表	317
補章2 スペクタクル理論とオリンピック：テレビ・スポーツ映像の解釈に向けて	325
2.1 緒言	327
2.2 オリンピック・イヤー 1988年	329
2.3 ソウル・オリンピックの開会式・閉会式の物語	332
2.3.1 開会式のテキスト	333
2.3.2 閉会式のテキスト	336
2.4 マカルーンのスぺクタクル理論	338
2.4.1 スペクタクル理論の概要	338
2.4.2 スペクタクル理論とイメージと現実	339
2.5 大きな物語の崩壊とスポーツの多様化	341
2.5.1 大きな物語としてのサクセス・ストーリー	341
2.5.2 ポスト・モダンとスポーツ状況	341
2.6 結語	344
2.7 本章のまとめ	344
文献 References	345
参考資料	347
参考資料1 日本におけるスポーツ映像の歴史	349
1.1 活動写真の渡来期	349
1.2 日本におけるスポーツ映像：戦前期	350
1.3 日本におけるスポーツ映像：戦後期ー現代	352
1.4 日本におけるスポーツ映像の様相	355
注	355
文献 References	359
参考資料2 『東京オリンピック』制作、公開及び論争の年譜	361
文献一覧 References	365
論文執筆状況と本博士論文への配置	383
謝辞	385